



## 映画雑感 8

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

正と不条理に切り込む若手ビジネス戦士たちのドラマ。無責任で不正を平気で押し通す経営陣を、それぞれの立場から一矢報いる若手たちに留飲を下げるのも、それだけ不祥事が横行する現実があるからでしょう。

▼19年下半年に観た映画から邦画を中心に。まずカンヌ国際映画祭で最優秀作品賞を受賞した「万引き家族」。血のつながらない家族の

様々な問題を撮り続けてきた是枝裕利監督が、社会や家族に見捨てられた人たちが寄り添う疑似家族を描きました。樹木希林、リリー・フランキー、安藤サクラなど芸達者な曲者たちのハーモニーが秀逸でした。

▼「空飛ぶタイヤ」は企業社会にはびこる不

剛がいつもながらの怪演で見せます。

▼「バトル・オブ・ザ・セクシーズ」は往年の名テニスプレーヤー、ビリー・ジーン・キングの苦闘を描いた伝記映画。夫がありながら同性に惹かれてしまう主人公が男性優位のテニス界に立ち向かいます。いまなお世界に根強く残る性に関する無理解を改めて考えさせ

てくれます。実在のテニスの女王を演じ切ったエマ・ストーンの体を張った存在感が見事

▼「世界で一番長い写真」は、ひよんなことから360度の写真を撮影できる回転式カメラに出会った内気な少年。卒業記念のイベントに全生徒を巻き込んで記念撮影を敢行します。素朴ですが映画的感興に溢れた好作品。

▼「カメラを止めるな」は、たった2館から始まって口コミだけで全国的ヒットになった今年最大の話題作。奇抜な構成とほぼ無名の俳優たちの熱演には圧倒させられました。

▼「響」。今年一番の怪作です。突然文壇に登場した天才少女が予測不能の振舞いで周囲を混乱させます。一見乱暴な言動が大人たちの欺瞞を叩き潰していく姿はまさに爽快そのも

のでした。

▼「日日是好日」は9月に全身癌でこの世を去った樹木希林の遺作。最後の出演作は19年公開予定ですが、すでに立っていることも難儀な状態を微塵も感じさせない凛としたたずまいは、まさに人生の達人のお手本です。

▼「止められるか俺たちを」は、若松プロのメンバーが同プロの軌跡をたどった、故若松孝二へのオマージュ。自分たちの映画を撮るために、ピンクと反社会のレットテルを貼られながらも、しぶとくエネルギーギッシュに時代を駆け抜けた若者たち。若松監督の秘蔵っ子になりながらあつけない死を遂げる女性助監督を体当たりで演じた門脇麦が記憶に残る演技を見せてくれます。